

## 動物における「紛争（もめ事）」解決と共感性の 生物学的起源

長谷川 寿一

（東京大学総合文化研究科）

「共感」様々な動物において社会生活や集団生活が観察されるが、鳥類や哺乳類における社会性のメリットとしては、捕食者からの防御、効率的な採食（餌情報の共有）、協同繁殖、集団なわばりの確保などが挙げられる。社会を維持する上で、集団内ではさまざまな親和行動（毛づくろいや挨拶行動など）や援助行動（警告声や養育援助行動など）などが発達しているが、他方、集団内のメンバー同士で資源（餌や配偶者など）や順位をめぐる競争や攻撃的な相互作用といった「紛争（もめ事）」も頻発する。集団内でのもめ事は、社会ストレスとして作用し、個体の健康状態を損ねるといった報告もある（ときには仲間からの攻撃で死に至ることさえある）。このようなもめ事による社会ストレスを緩和する行動として、社会的抗争後に多様な相互作用が見られ Post-conflict Behavior（葛藤解決行動）と総称される。具体的には、争った二個体間がその直後に示す親和行動（Reconciliation: 仲直り行動）、第三者が優位個体を宥める行動（Appeasement: 宥和行動）、第三者が劣位個体を慰める行動（Consolation: 慰撫行動）が霊長類を中心に報告されている。とくに仲直り行動は、霊長類以外でもヒツジ、ブチハイエナ、ライオン、イルカ、イヌ、マングースなどで広く観察される。他方、動物における慰撫行動の報告は断片的であるが、ヒト園児の観察においては、慰撫行動が 5 歳児において発達すると報告されている。

紛争解決の礎に横たわる共感あるいは同感、人の高度な社会生活を可能にする最も基本的、原初的な道徳感情として、古くから議論されてきた。アダム・スミスは、『道徳感情論』において、他者に同感を感じ、他者から同感を得るように振る舞うことをもとに社会に秩序が生まれると論じた。また、ダーウィンは、『人間の進化（由来）』において、共感について「社会的本能の最も重要な一要素として自然淘汰によって発達したことは、疑いえない」と述べている。近年、思いやりや共感、同情に関する進化的・神経科学的研究が急速に発展し、平成 25 年度からは新学術領域研究『共感性の進化・神経基盤』（代表：長谷川寿一）もスタートした。ここでは、共感性を情動伝染（快・不快感情の同期）、共感（動物界の援助行動など自動的無自覚的な他者感情の認知と行動調整）、同情（他者の感情理解と自覚的な行動調整）を連続的なシステムと捉え、共感性の起源をヒト以外の動物にも見出し、進化過程におけるヒト特有の共感性の成立機構を明らかにすることを目的としている。本発表では、向社会行動の生物学的基礎に学際的にアプローチする枠組みについて紹介してみたい。